摺者：鶴亭秀賀、画工：楳蝶楼国綱、版元：錦橋堂山田屋庄次郎、サイズ：縦75cm×横71cm。
振出しに登場する日本橋の若侍が上りの「御代とり」では花魁と大宴会。背景の書き込みも「頭には、初日の明けをいただきて、鶴も羽を伸す、春は来にけり」とおめでたいものです。

所蔵＝吉田 修　写真＝白石ちえこ

第5回 絵双六に魅せられて

鳥盡初音寿語六

江戸時代後期

西年に因んで江戸時代の超名品双六を紹介します。鑑賞ポイントは四つあります。

一、「とり」という言葉の駄洒落仕立ての双六です。稼とり、廉とり、客とりなどと、滑稽でくすっと笑わせます。二、浮世絵技法の「一文字ぼかし」が使われています。版木のぼかしたい部分に水を含ませ、その上に絵具をおいて、にじんだところを紙に摺りとると自然なグラデーションを描くことができます。上りのコマの蒼い空の色に使われています。三、江戸庶民の言葉が活写されています。作品中に見える女言葉は「ちょいとお母さん、嫌だわ、おまいさん、おいでなさいよ」などです。四、江戸の風俗・文化が垣間見られます。また、現代では存在しない職業名や言葉があります。「矢とり」（中央右から三番目）は盛り場や寺社の境内にある楊弓場の遊び女のこと、「引きとり」（下段左から三番目）は遊女の身請けのことです。多くの知的な発見ができる双六なのです。

袋　絵　この袋絵は歌川豊国の描いたものです。梅に鶯と美男美女の華やかな取り合わせが目を引きます。初音とは季節初めの鶯の声のことです。

婿取り　「チョイとお母さん、起きてよ、わたくしはお婿さんの来るのが誠に嫌だわ。」と書かれています。江戸は各藩の武士や職人・商人が集中する男社会だったので、売り手市場の女性は結構強気だったかもしれません。

文・監修 吉田 修
よしだ・おさむ●1954年生まれ、島根県松江市出身。全国次人情報協会常務理事、NPOキャリア権推進ネットワーク広報部長、和文化教育学会会員を務めるかたわら、築地双六館館長として双六の蒐集・研究・制作に取り組む。
公式HP＝http://www.sugoroku.net/index.html

2018

4
APRIL

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29 昭和の日	30 振替休日					